地域研究プロジェクト2013「田中正造とアジア」

研究組織：国際学部附属多文化公共圏センターセンター長　国際学部教授　高際　澄雄
後　　援：栃木市

1．事業の目的・意義

2013年は、栃木県の輩出した偉人、田中正造の没後100年にあたり、各地で記念行事が行われていますが、学問の府としての大学で実施する記念行事にふさわしく、研究成果を広く公開するものとして、近年の正造研究の成果に立つとともに、環境科学の成果も踏まえた、新しい田中正造像を提出する必要がありました。そこで、田中正造研究を活発に行っている研究団体、渡良瀬研究会で副代表を務めておられる赤上剛氏、長く渡良瀬川流域で研究を続けられた鉱毒事件田中正造記念館名誉館長布川了氏、韓国で田中正造研究を行っておられる円光大学校教授朴孟洙（パクメンス）氏、それに宇都宮大学教授で明治期の日朝文化交流を研究しておられる丁貴連（チョンキリョン）氏の４人を講師に招いてシンポジウムを開催しました。

また、地域に密着した行事とするために、田中正造が晩年の10年間活動した場所、旧谷中村に隣接する栃木市藤岡遊水池会館をシンポジウムの会場とし、谷中村の跡地渡良瀬遊水地を見ながら講演およびパネルディスカッションを行ないました。

さらに、参加者に現実性を持たせるために、前日に田中正造の関係地を巡る見学会を実施しました。

2．研究方法

⑴　田中正造研究の最前線についての講演

田中正造全集が完結して以後、正造の実像が明らかにされつつあり、最新の研究成果に関する講演を、赤上剛氏と布川了氏に依頼しました。その結果、赤上氏は「田中正造と戦争－日清戦争支持から軍備全廃論へ」、布川氏は「田中正造の青春時代と晩年の平等思想」と題して講演されることになりました。ところが、布川氏がシンポジウム直前に亡くなられましたので、赤上氏に布川氏の分までを含めた講演をお願いしました。

さらに、田中正造の思想と活動について、韓国でもシンポジウムが開催されたという情報が得られたので、丁貴連教授にお願いして、調べて頂きました。その結果、韓国円光大学校の朴孟洙教授が研究を行っていることが判明したので、朴孟洙教授を招聘し、「田中正造と韓国－田中正造と全琫準の公共的生き方」という演題で講演していただくことにしました。また丁貴連教授には、田中正造と韓国をより緊密につなぐために、「田中正造と内村鑑三、そして朝鮮」の演題で講演して頂き、最後に、すべてを関連させるために、パネルディスカッションを実施することとした。

シンポジウムの様子

⑵　スタディー・ツアーの企画

シンポジウムの会場を谷中村跡地の近くにとったことを利用し、前日に田中正造ゆかりの地を見学する見学会を「スタディー・ツアー」と名付けて実施することとしました。

3．事業の進捗状況

スタディー・ツアーは、12月７日㈯の午前９時30分より16時まで、シンポジウムは12月８日㈰の午前10時より16時まで、ほぼ予定でおり実施することができました。

４．事業の成果

⑴　田中正造最後の大演説会の掲示資料の発見

今回の地域連携事業で、予想しなかった成果の一つが、田中正造が亡くなる年、すなわち1913年（大正２年）の４月13日に行った大演説会の資料が発見されたことです。

赤麻村は、かつて赤麻沼から穫れる、フナ、コイ、ウナギ、エビなどの水産物で豊かな村でした。ところが、その沼に渡良瀬川が引き入れられ、谷中村に貯水池が作られることになったので、田中正造は大反対を唱え、渡良瀬川が流入すれば土砂で埋まり、水産漁業ができなくなって、村の豊かさが失われると主張していました。そこで、赤麻村の心ある村民が中心となって、田中正造の演説会を計画しました。

この大演説会の様子を記した島田宗三の『田中正造翁余録』によれば、この日数百人の人々が集まり、田中正造は２時間に渡って、学術的とも言える理路整然とした反対論を演説し、聴衆を深い感銘に誘いました。

ところが田中正造研究者は、赤麻沼の問題について、あまり触れていません。そこで、赤麻寺をスタディー・ツアー第１の見学地とすべく、赤麻寺を訪ね、お願いしました。

その際、赤麻寺のご住職に、『田中正造翁余録』に、演説にあたって、大日本帝国憲法の勅語などを大きな紙に書いて掲示した、と書かれているので、この資料が残っていないかを尋ねたところ、翌日、ご住職自ら、当時演説会を主催したお宅から、それらしきものが出てきたとお電話くださいました。それで、早速、田中正造研究の第１人者、布川了先生に鑑定していただきましたところ、その時の資料に間違いないと断言されました。

大きな発見であったので、ご住職と一緒に記者発表をすると、下野新聞、読売新聞、朝日新聞が大きく報道してくれ、下野新聞にいたっては、トップ記事として扱ってくれました。今後、当資料の詳しい調査を行う必要があります。

⑵　スタディー・ツアー

参加者は26名、マイクロバスを借り上げ、事務を栃木市藤岡町の旅行業者の酒井一則氏にお願いしました。参加費は無料としました。

１．赤麻寺

赤麻寺では最初に田中正造の演説会場に予定された大日堂を見学しました。赤麻寺のご住職、仙台光俊氏から説明を受けました。

この大日堂は江戸時代に作られ、中に大きな大日如来の大きな仏像が安置されており、いかに赤麻村が赤麻沼の水産物で豊かであったかを示しているとのことでした。

また付近には、かつてはお茶屋、寿司屋、風呂屋、炭屋などが軒を連ね、町を形成していたと詳しく説明くださいました。

それから、赤麻寺へ移動し、土手の上から渡良瀬遊水地を眺めました。かつてはここに広大な赤麻沼があり、すぐ下が船着場になっていて、水産物が水揚げされていた様子を話されました。

発見された掲示資料の説明

最後の大演説会が行われた赤麻寺にて

さらに、赤麻寺では、発見された掲示資料について、発見の経緯が語られ、その内容に意義について赤上剛氏が詳しく話されました。寒い日で、赤麻寺のご好意で、甘酒を振る舞っていただきました。

最後に、本堂の当時の様子、そして田中正造が演説を行ってとおもわれる場所と聴衆が集まった場所が示され、最初の見学を終わりました。

2．渡良川掘削地

渡良瀬川は藤岡大地を掘削して、赤麻沼に引き入れられました。その掘削地近くに17代に渡って住んでおられる関口家の当主で栃木市議会議員の関口孫一郎氏から、掘削前の底谷村の様子、そして掘削に至る経緯について、関口家に残る資料に基いて説明頂きました。関口氏は、その資料をコピーして全員に配布してくれました。

3．松安寺

海老瀬本郷の松安寺では、前住職の高山全弘氏から、渡良瀬川の川筋が変わってからも、板倉がどのように水害に苦しんだかを資料を使って説明されました。またカスリーン台風の際の土手の決壊の際、小学生だった高山氏と奥様は、人々の混乱の様子を目撃されています。

明治の洪水には、高崎ダルマの型が流れてきて今でも保存しています。

明治の洪水で流れてきた高崎ダルマの型

歴史として興味深かったのは、天草の乱が起こる10年前に、下宮で隠れキリシタン500人が集められ、400人が惨殺されたそうです。残った人も古河で殺されたとのことです。松安寺には隠れキリシタンの崇拝の対照、如意輪観音を安置したお堂があります。

4．伊賀袋

みちの駅きたかわべで30分ほど食事休憩をして、北川辺の伊賀袋を訪れました。ここは川筋が変えられて以後、唯一渡良瀬川の昔の面影を残す場所です。ここで赤上氏から、川辺と利島の人々の遊水地化反対闘争についての歴史を聞きました。田中正造が指導して反対運動が成功した経緯とその後の谷中村支援の戦い、その後の経験の継承は、これからの運動について大いに考えさせられました。

昔の渡良瀬川の面影を残す伊賀袋

5．大　沼

旧谷中村合同慰霊碑の反対側に、谷中村時代から残る唯一の沼、大沼について、近くで川魚点を営む川島英信氏から、かつての大沼の様子を話していただきました。かつては、小沼もあって、深い湧き水の沼で、魚が大量に穫れたとのことです。現在は底にはヘドロがたまり、昔の面影が失われつつあります。渡良瀬遊水地を湿地として守るには、この湧き水を復活することが、鍵となるように思います。

6．排水機跡

荒畑寒村が『谷中村滅亡史』で谷中村滅亡の原因と書いた、排水機跡を見学する予定でした

が、ヨシの繁茂で中に入ることができず、土手の上から赤上氏に解説をお願いしました。

土手から排水機跡を眺める

赤上氏によれば、排水機が谷中村の滅亡に繋がったとするのは、間違いだそうです。大野村長は、これ以外に例えば三国橋の渡しの運営など手広く扱っており、大きな視野から問題を眺める必要があることを強調されました。

⑶　シンポジウム「田中正造とアジア」

シンポジウムには90人の参加がありました。最初、主催者として、附属多文化公共圏センター長の高際澄雄氏が、挨拶しました。

続いて、シンポジウム企画の経緯を話しました。田中正造没後100年にあたり、大学としてできる地域貢献として、新しい田中正造像を示すことを目的として企画されたことをまず伝えました。そして高際センター長個人が渡良瀬遊水地近くで生まれて、家族の多くが田中正造と何らかの関わりを持っており、今回の企画に生かしたいと思ったこと。さらに田中正造の研究、および環境科学が進歩しており、それらを反映したシンポジウムを行う必要性があると感じたことを、シンポジウム企画の理由に挙げました。

最後に会場に展示された、田中正造最後の大演説会で使われた掲示資料の発見の経緯の説明が行われました。

10時30分より、最初の講師、渡良瀬川研究会副代表の赤上剛氏が「田中正造と足尾銅山鉱毒事件－正造の人権・平等思想－日清戦争支持から軍備全廃論への軌跡」との演題のもとに、１時間30分に渡って、詳しく話されました。足尾銅山鉱毒事件は、銅１トンを生産するのに猛毒の硫酸・ヒ素４トンが排出されることに根本問題があります。この人災を、政府は人民の犠牲に転換し、谷中村を廃村にし、遊水地を建設しました。田中正造は、当初日清戦争を支持していましたが、戦争の間に鉱毒の被害が広がった事実に衝撃を受け、戦争を支持するための銅生産と洪水鉱毒問題の関係に気づいて、以後軍備全廃を主張するようになります。正造の考えは、極めて広く、人権、平等、自治、環境、学問、軍備に及んでいます。これらについて赤上氏は事実に基づき、丁寧に説明し、行動しながら考えを深めていく田中正造の偉大さの源泉を明らかにされました。

鉱毒被害の深刻さを語る赤上剛氏

昼食後、１時より、第２の講師、韓国円光大学校教授朴孟洙氏は「田中正造と韓国－全琫準と田中正造の公共的な生き方」との演題のもとに、日清戦争開始直後の朝鮮の状況と東学農民革命とその指導者全琫準の思想について、詳しいお話がありました。東学農民革命は、もともとは朝鮮の政治を変えようと始まったのですが、日本が侵略するに及び、日本軍への抵抗運動に変わっていきました。そしてその指導者全琫準には公共心があふれていました。彼は最後には捉えられて殺されますが、この精神は「公共する」ことの大切さを説き、その精神に生きた田中正造と共通していました。だからこそ、東学農民革命に対する日本軍のホロコーストを知って、嘆くと同時に東学農民革

命を高く評価したのだと説明されました。田中正造の思想の独創性が朴孟洙氏の講演で明らかにされました。

東学農民革命について語る朴孟洙氏

続いて、宇都宮大学国際学部教授丁貴連氏が、「田中正造と内村鑑三、そして朝鮮」と題して、内村鑑三の晩年、いかに日本に絶望し、朝鮮の信者に希望を見出したか、そしていかに現在内村鑑三が韓国で高く評価されているかについて詳しい説明がありました。田中正造に聖書を送ったのは、内村鑑三と言われているので、その二人の関係を考えると、内村鑑三との関連で、これから韓国でさらに田中正造が知られる可能性があると指摘されて講演を終わりました。

内村鑑三と朝鮮の結びつきを語る丁貴連氏

質疑応答は、多くの質問がありました。質問に対して各講師が丁寧に答えられましたが、朴孟洙教授はなぜ東学農民革命の研究者になったのかを語られました。教授は、仏教徒であるにもかかわらず、徴兵制で軍隊に入っていたとき光州事件が起き、多数の市民が犠牲になったことを知り、直接には関わらなかったにもかかわらず、深いこころの傷となって残り、やっと東学農民革命を研究し、日本に留学して、憎しみを越えた日韓共同研究に従事することで、乗り越えることができた、と語られ、深い感銘を残しました。

講演に熱心に聞き入る参加者

最後に高際センター長が、田中正造の偉大さは、ガンディーに匹敵するが、これからはその偉大さを、各人が活動を通じて思想の深さと広がりを発見していかなければならないと結んで、２日間にわたる行事を終了しました。

田中正造とカンディーの比較

	田中　正造	ガンディー
生没年	1841－1913	1869－1948
対抗者	抑圧的支配層	大英帝国
民衆運動開始年	1891年	1894年
運動の方法	非暴力抵抗	非暴力抵抗
信条	無所有	無所有
弱者への態度	被差別民への好意	アウトカーストへの敬意
生命の尊重	「非命の死者」の認識	不殺生
伝統産業の保護	地元産物の重視	チャルカを象徴に